

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.006

2012.3

- 秋入学と国際化
- 高等教育研究センターの活動紹介
- スタッフからひとこと

信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

速報:「秋入学」と「国際化」

●●●東京大学が「秋入学」全面移行を検討開始●●●

本年1月20日の東京大学・濱田純一総長による記者会見は、センター試験翌週という大学入試シーズン真っただ中の日本で、大きな反響を呼びました。皆さんご存じのように、学士課程の入学時期を「秋入学」へ全面移行する検討に入ったとの記者会見でした。これまでも濱田総長は、様々な機会で東大が秋入学に関する検討を行っていることを表明していましたが、一部では注目されていたものの、一般にはそれほど知られるものではありませんでした。このニューズレターが、皆さんのお手元に届くころは、前期試験と後期試験の間で、多くの皆様が学生の受け入れについてより関心をお持ちのころかと思います。秋入学の実施については、まだまだ検討段階との見方もありますが、この時期にぜひじっくり考えていただきたいと存じ、第一弾の情報を提供いたします。



よりグローバルに、よりタフに

この記者会見の基礎となる東京大学・入学時期に関する懇談会の中間まとめである「将来の入学時期の在り方について—よりグローバルに、よりタフに—」が提出されたのが、昨年(2011年)の12月8日です。この日の提出というのは少々皮肉ですが、報告書の副題にもありますように、入学時期の秋への変更の大きな理由はグローバル化です。そもそもこの検討に入ったのは、一昨年(2010年)の3月に同総長が示した「行動シナリオ」の重点テーマ「タフな東大生の育成」「グローバルキャンパスの実現」に沿ったもので、昨年(2011年)4月の同シナリオのフォローアップ作業から、さらに教育改革を加速することが求められたためです。ある意味では、この1年(2010年)の間で十分な改革の成果、特に教育の国際化について進捗が見られなかった、とフォローアップで認識されたものと想像されます。この時期に、検討に入ったことは外部にも示され、その後も様々なメディアを通じて、総長が表明されているのですが、それでも1月20日の記者会見はインパクトがありました。

いち早い対応姿勢を示す社会

いち早く政府筋は、国家公務員の入省時期の秋卒業への対応検討を示唆しましたし、産業界からも理解あるいは期待を表すコメントが出されました。これまでも多

くの大学で秋入学を試み、実施してきておりますが、その内容は限定的であり、特に学士課程においての例が少なく、ある大学などは一度実施したものの撤退したところもありました。撤退の大きな理由は、就職時期など日本の社会制度との不整合でした。東京大学の検討内容は、学士課程のそれも秋入学への全面移行という、これまでの試みとは一線を画すもので、東京大学が実施するということもあり、社会の側からそれに呼応する状況になってきています。



根本から考える良い機会か?

先にも述べましたように、秋入学移行の最大の理由は「国際化」で、留学生の受け入れ促進に加え、日本人学生の外国留学への障害を除き、双方の行き来による交流を深めて学習意欲を増大する(「タフな東大生」となる)ことです。果たして入学時期を秋に移行するだけで「国際化」が実現するか、難しいところです。しかし、真の意味での国際通用性のある学生を育成するため、過去の経緯に囚われず、入試の方法も含めて大学の入口である入学までのプロセスの再検討や、ギャップタームの活用や初年次教育の充実などを、根本から考える機会となったのではないのでしょうか?上記の報告書等は東京大

学のウェブページ(<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/fall.enrollment.html>)にまとめて提示されていますので、まずは、皆様方が生のデータでご検討いただきたいと思います。今回のニュースレターでは、速報と問題提起のみとし、その解説・分析や他大学の対応等については、稿を改めてお知らせしたいと思います。



高等教育研究センターの活動紹介【各部局でのFD活動への協力】

農学部でFD講演会を行いました

2月13日(月)、農学部において「第7回農学部FD講演会」が開催されました。農学部FD担当部署からの依頼をいただき、高等教育研究センターからは、加藤鉦三教授・加藤善子准教授が講師として参加しました。

今回は「GPA制度」をテーマとし、最初に「GPAとは」「国内標準vs.北米標準」「成績評価の厳格化？」等の説明をしました。その中で、GPA制度を導入することで何をやりたいのか、国内標準・北米標準のGPA制度における現状とは、GPA制度をきっかけに本学ではどのような教育文化を醸成していきたいのか、などについて改めて考えました。



↑当日の様子



また、過去に高等教育研究センターに寄せられた問い合わせの内容を「よくあるご質問」としてスライド・資料にも提示し、さらに質疑応答にて参加者の先生方に自由に発言をしていただき、活発な意見交換を行いました。

←講師を担当した加藤鉦三教授(左)と加藤善子准教授(右)

★当日の配布資料を高等教育研究センターウェブサイト内の「FD活動報告」に掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

URLはこちら⇒ <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/>

各部局でのFD講師を担当しています

高等教育研究センターでは、平成23年度中に、同じように部局からの依頼をいただき、FD講演会等の講師を担当しています。

◆これまでの部局におけるFD活動◆

- ★平成23年 6月21日 理学部「チューター・メンター研修会」(参加者約30名※教員・学生等)
- ★平成23年10月17日 第5回農学部FD講演会「FDとは?～必要性和義務の間で考える～」(参加者約25名)
- ★平成23年11月 1日 理学部FD研修会「GPA研修会」(参加者約30名)
- ★平成23年11月14日 第6回農学部FD講演会
「『教育の質』をいかに測るのか—教員業績評価書・今年度の対策講座—」(参加者約30名)
- ★平成23年12月 5日 保健学科FD準備講座「グループワークをデザインする」(下記FD開催側準備)
- ★平成24年 1月18日 平成23年度医学部保健学科看護学専攻臨地実習指導者会議におけるFD講演会
「学生に自信をつけさせる授業運営」(参加者約80名※臨地実習施設関係者等)



また、「平成24年度新任教職員研修」における「FD研修」や、農学部FD講演会など、平成24年度中のFD講師依頼を複数いただいています。

スタッフからひとこと

将来を支える人材の育成や日本の国際競争力の強化のために、今、国立大学は強く改革を求められています。その重点事項は、教育の質保証と個性・特色の明確化、大学間連携の推進、大学運営の高度化等です。多忙であっても教職員一人一人が信州大学の将来像を真剣に深く考えねばならない時期を迎えていると思います。

(センター長 小池 健一)

